

保護者アンケートにみる保育園から小学校への 移行期における友だち関係 ：コロナ禍により友だちとの接触が制限されたことを考慮して

A questionnaire study of parents' perception about friend relationship during transition from day nursery to elementary school : Consideration of the limited contact among children under COVID-19 pandemic

河原 紀子

Noriko KAWAHARA

問 題

保育園や幼稚園などを卒園し、小学校へ入学するという出来事は、子どもたちにとって新たな友だちとの出会いの契機であると同時に、「段差」や「危機」に直面する契機でもある（山本, 1992; 酒井 2010など）。小学校への移行や接続に向けて、幼稚園、保育園、認定こども園及び小学校などにおいて、これまで様々な支援や取り組みがなされてきた（一前, 2011, 岩立, 2012など）。そのような幼保小の連携に関する論文をレビューした岩立（2012）によれば、近年では幼保小連携の背景や実践の意義・課題に関する研究、あるいは学び・目標・カリキュラムに関する研究が多く、それらの検討を通して今後の幼保小連携や接続の実践の方向性について論じている。中でも、子どもたちが小学校という新たな環境へ適応し自己発揮を可能にするために、保育園・幼稚園と小学校、それぞれ異なる文化がどのように繋がるのか、保育者と教師のさまざまな葛藤や対立、調整のプロセスについての研究の必要性を指摘している。

一方、小学校への環境移行は、子どもだけでなくその保護者にとっても重要な問題である（綾野・西坂・村上・権藤, 2019）。移行過程における保護者の意識に着目した椋田（2013）は、

入学前の期待や不安などについて幼稚園の保護者を対象にインタビュー調査を行った。その結果、最も多く述べられた不安は「友だち関係への不安」であり、次に「適応への不安」、「教師への不安」と続いた。また、入学後の期待については「友だち関係への期待」が最も多く、次いで「自立への期待」「適応への期待」であった。保護者にとって、就学前後の「友だち関係」が最も不安であり、期待も大きいことが示されている。同様の結果は、山田・大伴（2010）による保護者への質問紙調査においても指摘されている。保護者からみた就学前後に心配なことは、「子ども同士の関係」が最も多く、就学前44.0%に対し、就学後66.0%と就学後に回答の割合が高くなる傾向が見られたという。さらに、幼稚園の5歳児担任らも、接続期を意識した指導として、「トラブルも含めて友達とのかかわりを自分達で進めていく」などの「友達とのかかわりの工夫」を挙げている（山田・大伴, 2010, P.101.）。このように、保護者も幼稚園の担任も就学にあたって、友だち関係を形成することについての関心が高く、質問紙やインタビューなど各手法で検討されていることがうかがえる。

このような背景には、友だちとの関係を円滑に築くことが、他者への思いやりや援助行動、

コミュニケーション能力といった社会性（社会的能力）の発達にとって重要であることが関連している（倉持, 2016）。中澤（2017）は、幼稚園の年長児へのインタビューと各幼児の社会的行動に関する幼稚園・小学校の担任教師による評定から、小学校への移行期における仲間関係について検討した。その結果、年長時に「一緒に遊びたい友だち」は誰か聞かれたことに対し仲間から選ばれる人数が多い子は、小1時に攻撃や不安が低いといった社会的行動との関連が見られたという。友だちから選ばれる人数が少ない、すなわち仲間関係が乏しいと、社会的スキルを学習する機会も少なくなるため、幼児期において豊かな仲間関係を築くことが重要であると述べている。ただし、この結果は研究対象である年長児の多く（52名／58名中）が付属幼稚園から付属小学校へ進学しているという仲間集団の構成や子ども同士の関係性と関連しているかもしれない。

保育園や幼稚園などから小学校へ入学する際、どの程度出身園が同じ友だちがいるか、あるいは仲の良い友だちがいるかによって移行期における友だち関係は異なってくると考えられる。椋田（2013）の研究対象である保護者の語りには、「団体できてくるクラスじゃないみたいで、（中略）一人で来てる子や二人だけとか、そういう子を結構集めてもらっている」（P.240.）といった内容があるように、多数（団体）ではなく少人数で入学した子どもへの小学校教師の配慮や支援、あるいは「幼稚園から好きな子と（中略）良く遊んでいます」（P.240.）などの就学前の子ども同士の関係性が継続していることが保護者の就学後の「友だち関係への不安」が解消される理由となっていた。つまり、保育園や幼稚園などから、小学校へ入学（進学）する際、地域特性や個々の事情によって、多くの子どもたちが同じ園から一つの小学校へ入学する場合もあれば、一人または少数が複数の小学校に分散して入学する場合もある。それによって、保育園・幼稚園における子ども同士の関係性が継

続できるか否かなども左右されるが、移行期における友だち関係についてそのような観点では十分検討されていない。

Kawahara & Negayama（2018）および河原（2019a；河原, 2020）は、幼児期における「友だち」関係やその認識について、一園の3、4、5歳児の幼児を横断的検討してきた。さらにKawahara & Negayama（2019）および河原（2019b）は、3歳児～4歳児クラスの幼児を縦断的に検討してきた。それらを踏まえ、保育園において形成された友だちとの関係が就学後どのように変化・継続するのか、検討することがさらなる研究課題である。その際、探索的ではあるが、研究対象の保育園、小学校のどのような地域特性を考慮する必要がある。園や小学校が、東京都23区の北部に位置し、当該保育園（1園、年長1クラス）から一人または少数が複数の小学校へ分かれて入学すること、それらの小学校には1年生約90～130名、それぞれ3～4クラス（35名定員）、各小学校に2～4の学童保育所を有することなどである。

さらに、2020年度の新1年生は新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）が流行する中で、保育園から小学校への移行期を迎えることとなった。すなわち、2020年の1月15日に国内で初の新型コロナの患者が確認され、「感染リスクにあらかじめ備える観点から」3月2日から、全国の小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の一斉臨時休業、さらに4月7日には7都府県に「緊急事態宣言」が発出され、4月16日にはその対象が全国へ拡大された。小学校の入学式は限定的に実施されたものの、臨時休校は「緊急事態宣言」解除後の5月末まで継続されることとなった。また、6月から小学校が再開されたといっても、分散登校（2週間）から始まり、感染対策のためのマスクの着用、友だちと距離を保つこと、会話やかかわりの制限など通常とは大きく異なる移行期を経験することになった。このようなコロナ禍の異例の時期に、保育園から小学校への移行を迎えた子ど

もたちは、6月の小学校再開まで、家庭の事情や保護者の就労状況等によって自宅で過ごしたり、学童保育所に通ったり、これまでにない生活を余儀なくされた。通常であれば、新たな友だちの顔を見て声を聞き、教室や校庭で友だち触れ合いながら学んだり、遊んだり、一緒に会話しながら給食を食べたりする中で、友だち関係が形成されるはずであった。このようなコロナ禍で友だちとの接触が制限された子どもたちの、保育園から小学校への移行期における友だち関係の実態を明らかにすることは、移行期における配慮や支援の課題を改めて見出す上でも非常に重要な問題である。そこで本研究では、コロナ禍で友だちとの接触が制限された時期に、保育園から小学校への移行期を経験した子どもたちの友だち関係について、保護者アンケートにより明らかにすることを目的とする。

方 法

調査協力者： 都内A保育園を2020年3月に卒園した年長児の保護者12名。

実施期間： 2020年7月下旬～8月上旬。小学校再開（分散登校含む）から、約2か月後に配布・回収した。

手続き： 河原（2019b）およびKawahara & Negayama（2019）の研究協力児20名（年長クラス全員）の保護者を対象に、2020年3月、就学後のアンケートへの協力に関する依頼文書を配布し、14名から協力する旨の回答を得た。その際、アンケートの配布・回収方法について、自宅への郵送・返送と保育園での配布・回収の2パターンのうちいずれかを選択してもらった。それに従って、アンケートを14部配布し、12部回収された。

アンケートの内容は、以下の4項目で構成された。1. 学童保育の利用状況：4月～7月までの時期ごとの当所頻度および同じ保育園出身の友だちの有無について尋ねた。2. 小学校での所属クラス：同じ保育園出身の友だちの有無について尋ねた。3. 就学後の友だち関係に

ついて：4月以降7月末までの家族との会話の中で、「同じ保育園出身の友だち」、「学童保育所での新たな友だち」、「小学校（学童保育所除く）での新たな友だち」それぞれの話題の頻度と内容及び小学校が再開された6月以降の週末・休日におけるそれぞれの友だちとの遊びの頻度について尋ねた。また、コロナ禍での友だち関係で気になることなどがある場合は記入してもらった。4. 保護者同士のかかわり：保育園の保護者同士のかかわりの有無と「有」の場合のかかわりの内容について、尋ねた。アンケートは記名式で回答してもらった。

また、保育園における子どもたちの友だち関係を捉える指標として、年長時の12月に個別に実施したインタビュー結果から「年長時の仲良し」を特定した¹。

なお、本研究は共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理委員会（承認番号KWU-IRBA#17113）の承認を得た。

結果と考察

ここで取り上げる「友だち」には、主に次の3タイプがある。第一に、保育園の年長クラスのメンバーである「保育園の友だち」、第二に、「学童保育所での新たな友だち」（以下、「学童保育所の友だち」）、第三に、学童保育所での新たな友だちを除く「小学校での新たな友だち」（以下、「小学校の友だち」）である。それに加えて、保育園の友だちの中でも、年長時のインタビュー結果から特定された「年長時の仲良し」についても部分的に取り上げて検討する。

以下の結果と考察では、まずは12名の子どもたちが何校の小学校に何名で入学したのか、その小学校や所属クラス、学童保育所において保育園の友だち、年長時の仲良しがどの程度がいるか否かを検討する。次に、4月～7月末までの学童保育所の利用状況を把握したうえで、4月～7月末までを3つの時期に分け、時期ごとに3タイプの「友だち」（保育園の友だち、学童保育所と小学校の新たな友だち）について、

家庭でどの程度話題にしていたか(頻度)、またその内容についての検討を行う。さらに、小学校が再開された6月以降、週末や休日に前述の3タイプの「友だち」と実際に遊ぶ頻度やその内容について検討し、最後にコロナ禍における友だち関係で保護者が気になることについて取り上げる。これらを通して、保育園から小学校への移行期における友だち関係の特徴について、コロナ禍で友だちとの接触が制限されたことを考慮して明らかにする。

1. 小学校への入学状況と「保育園の友だち」関係

今回の研究協力者の子どもたち12名²は、表1の通り4つの小学校へ入学した。それらすべての子どもに保育園の友だちが1～3名いること、S太以外は小学校に同性の保育園の友だちがいるという状況であった。

また、小学校のクラス分けにおいて、保育園の友だちが「いる」子どもは12名中8名(66.7%)であり、同じ小学校に保育園の友だちが複数入学していても、必ずしも同じクラスになるわけ

表1 小学校への配属状況

子ども	性別	小学校
Sk子	女	A (他2名)
Y美	女	
Ka男	男	
R吉	男	
T美	女	B (他1名)
St子	女	
Ha太	男	
Ke男	男	C (他2名)
N子	女	
Ha美	女	
C香	女	D (他1名)
S太	男	

注) 記載した子ども以外に同保育園から当該小学校へ入学した子どもの数を他〇名と記載した。

ではないため、相対的に少なかった(図1-1)。また、一つの小学校に2～4の学童保育所があるため、小学校が同じでも学童保育所は異なることもあったが、同園出身の友だちが「いない」子どもは1名のみであった。

次に、「年長時の仲良し」が小学校、そのクラス、学童保育所にいるかどうか調べた。その結果、図1-2に示したように、小学校には12名中7名(58.3%)で相対的に最も多く、小学校のクラス、学童保育所と順に少なくなる傾向が見られた。

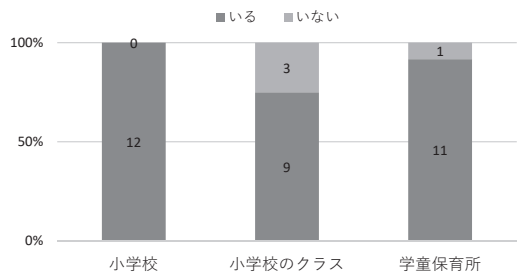


図1-1 保育園の友だちの有無

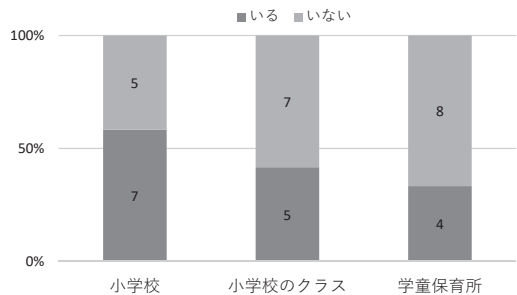


図1-2 年長時の仲良しの有無

注) 図内の数字は人数を示す

2. 4月以降の学童保育所の利用状況

4月初めに最小限の入学式があった以外は、5月末まで小学校は休校だったため、4月～7月までの学童保育所の利用状況について尋ねた。その結果、図2のとおり、4、5月は半数以上が利用していないか、週1～3日までの利用であった。それに対し、「緊急事態宣言」が解除され、小学校が再開された6月以降は半数

保護者アンケートにみる保育園から小学校への移行期における友だち関係

以上が週4日以上利用となっていた。つまり4、5月は、半数以上の子どもたちが家庭中心の生活を余儀なくされ、友だちとの接触やかかわりの機会が限定されていたことが推測される。

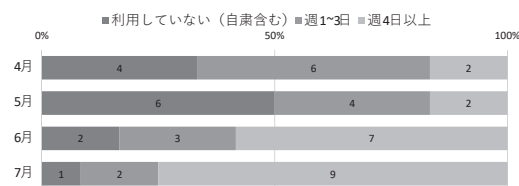


図2 学童保育の利用状況

注) 図内の数字は人数を示す

3. 「友だち」に関する話題

保育園から小学校への移行期にあたる4月～7月を、小学校の休校中の4、5月はまとめ、小学校が再開された6、7月は1か月ごとに、3つの時期に分け、家族との会話において、「保育園の友だち」、「学童保育所の友だち」、「小学校の友だち」に関する話題の頻度（よくする～全くしないの4件）とその内容について尋ねた。

(1) 頻度

まず頻度については、「保育園の友だち」に関する話題は、4月～7月を通して「時々する」「よくする」が多かった(図3-1)。また、「学童保育所の友だち」については、4・5月も週に1日以上通っていた子どもが半数以上いたため、「時々する」「よくする」が半数以上であった(図3-2)。一方、「小学校の友だち」については、入学式以外は休校のため、4-5月は「全くしない」「ほとんどしない」が相対的に多かった。それが、6月から小学校が再開され、「小学校の友だち」に関する話題も「時々する」「よくする」が半数以上となり、7月には「よくする」が半数を超えるようになった(図3-3)。

(2) 話題の内容

次に話題の内容については、「保育園の友だち」とそれ以外を分けて検討する。

① 保育園の友だちについて

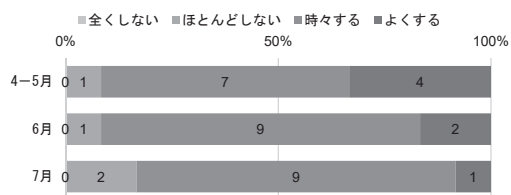


図3-1 「保育園の友だち」の話題

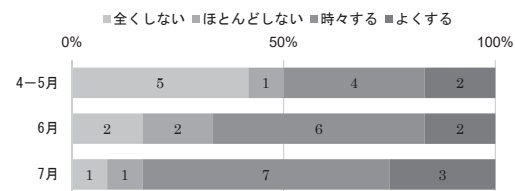


図3-2 「学童保育所の友だち」の話題

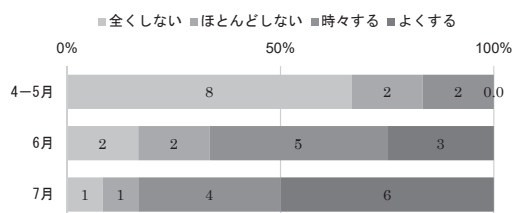


図3-3 「小学校の友だち」の話題

注) 図内の数字は人数を示す

「保育園の友だち」は、属性によってさらに「年長時の仲良し」「同じ小学校・学童保育所の友だち」「他の小学校の友だち」の3つに分けられる。保護者の自由記述の内容が、それら3つとその他・不明、を合わせた4つのうちいずれに該当するか、記述から件数をカウントした³(図4)。その結果、4-5月は、「同じ小学校・学童保育所の友だち」に関する話題が相対的に多かった。具体的には、「(小学校のクラス分けで)同じクラスになった」や「学童でC香ちゃん、お休みだった」「学童で一緒に遊んだ」などで、4月は入学式のみは行われたこと、半数以上はこの時期も学童保育所に週1日以上通っていたことが関係しているかもしれない。

6、7月は「仲良しの友だち」や「同じ小学

校・学童保育所の友だち」の話題が同程度に多かった。同じ小学校に「年長時の仲良し」がいる子どもは、「かけっこで競争した」「校庭で遊んだ」「学童で遊んだ」「一緒に帰ってきた」といった実際に行った行動や会話の内容が挙げられていた。それに対し、同じ小学校に「年長時の仲良し」

は「お家で何してるかな」「新しく友だち出来たかな」などと友だちへの思いを巡らしたり、「年長時の仲良し」と「会いたい、遊びたい」といった願望が語られていたことが特徴である。その他としては、小学校は異なるが保護者同士のつながりがあり、近くの公園などで一緒に遊ぶ機会がある友だちについての話題も挙げ

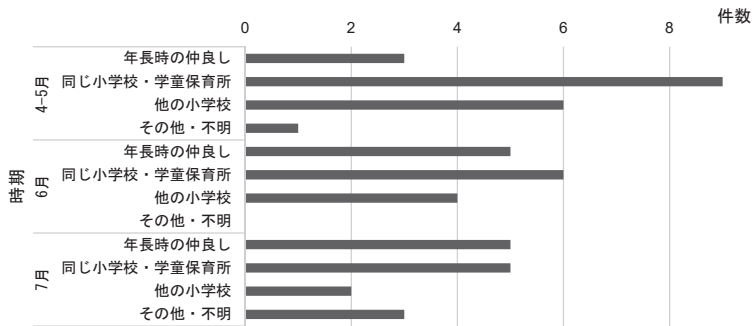


図4 話題にした「友だち」の属性

表2 学童保育所・小学校での新たな友だちに関する記載内容 (抜粋)

	友だちの名前	遊び	隣席	登下校	注目される行動
学 童 保 育 所	「学童で〇〇ちゃんと〇〇ちゃんと友だちになったよ」	学童でサッカーで遊んだ。ドッチボールして逃げまわった	「お弁当の時、〇〇ちゃんとなりになった」	7月はじめごろから一緒に帰っている学童のお友だちの名前をおしえてくれました	
	学童で出来たお友だちの名前をよく口にしている)	学童の友だちと、×××というオモチャであそんでとってもたのしい	おやつはアレルギーのある子どうして食べていたようで、そこでできた友だちと話をしたと言っていました		
	覚えたお友だちの名前の報告が続きました	学童でお友だちとトランプ、ウノ、オセロをしたようです			
小 学 校	小学校の友だちはできたが、名前はわからないとのこと	休み時間に小学校のお友だちとドッチボールしたようです	6月初め 席の近い友だちの話が多かった	6月中旬 登下校同じコースの友だちの話も始まった	小学校のお友だちのなかで、字が上手な子、下手な子の名前をおしえてくれました
	小学校の友だちも最初の2~3週間は名前も知らないと言っていました	休み時間に登り棒と一緒に乗ったなど		学校の友だちと下校の時にゲームの話をした	授業で〇〇くんが先生に怒られていた
	小学校の友だちの名前を少し覚えて話していました	一緒に折り紙をした話をしてくれました			机の隣の男の子が先生に怒られた話ひらがなで上手に書けたので飾られた話

られていた。

②学童保育所・小学校の友だちについて

次に、「学童保育所の友だち」と「小学校の友だち」の話題について検討する。これらは、保育園よりも記述件数が少なかったため、時期を分けずに特徴的な記載内容を抜粋して表2に示した。

学童保育所と小学校に共通する話題は、＜友だちの名前＞、一緒にした＜遊び＞、食事やおやつ、教室で＜隣席＞になったこと、一緒に＜登下校＞したこと、についての4つが挙げられる。記載内容から、まずは友だちの＜名前＞を覚えることから始まり、学校の席順、お弁当やおやつで席が＜隣接＞することや一緒にドッチボールやトランプなどの＜遊び＞をしたこと、あるいは一緒に＜登下校＞するといった体験をきっかけに新たな友だちとの関係ができ始めていることが読み取れる。

また、「小学校の友だち」にのみ見られた話題として、＜注目される行動＞が挙げられる。これは、字が上手な友だちのことや友だちが先生に怒られたことなどであり、注目される行動を示した友だちあるいは関心を引く友だちの行動が印象に残るようである。

以上の記述は、早ければ4-5月から記載されたが、中には4-5、6月の記載はなく、7月になって「友だちはできたが、名前はわからない」といった記述のみされた事例も見られた。この事例は、保育園においても友だちとうまくかわれず、一人で遊ぶことがあったことから、移行期において配慮が必要な可能性が考えられる。

4. 週末・休日に遊ぶ友だちについて

小学校が再開された6月以降、週末・休日などに、「保育園の友だち」、「学童保育所の友だち」、「小学校の友だち」と一緒に遊ぶことがあるか、その頻度（よくある～全くしないの4件）と内容について尋ねた。

その結果、図5の通り、「保育園の友だち」

と一緒に遊ぶことが「よくある」「時々ある」が多く、学童保育所や小学校での新たな友だちと一緒に遊ぶことは「全くない」か、「ほとんどない」が多いことが分かった。この時期はまだ保護者同士の新たな関係もできていないもとの、子どもが友だちと遊ぶ約束をしてきたと言っても「親を知らないので行かせていない」という状況もあったようである。

具体的な遊びの内容としては、いずれの「友だち」も近所の公園で遊ぶことが多く、「保育園の友だち」では遊具やボール遊びをしたり、待ち合わせて虫取りに行ったり、学童保育所や小学校の「友だち」では誘われて公園や家の近くで遊ぶなどであった。

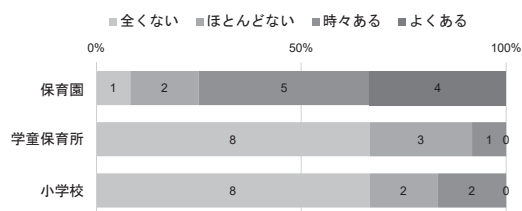


図5 6月以降、週末・休日に遊ぶ友だち

注) 図内の数字は人数を示す

5. コロナ禍における友だち関係で気になることなど

アンケートを配布した2020年7月下旬は、新型コロナウイルスの感染者数が増大している状況であった。そのため、保護者がコロナ禍において子どもたちの友だち関係で気になることや、影響があると感じていることがあるかどうかについて尋ねた。その結果、半数以上の8名（66.7%）の保護者が「ある」と回答した。その具体的な内容としては、「なかなかお友達を作れない」「友だちと親しんで遊ぶことができるだろうか?」といった漠然とした心配や不安もあれば、「分散登校が終わるまでは、休み時間もまわりの子と話すのはダメだったようで、学校がつまらないと言っていた」や「常にマスク着用で居心地がよくない」、「友だちの顔がわかりにくい」と

いった具体的な子どもの不満、さらには、「週末などは誘いづらい」や「家に遊びに行ったり深い関係はできづらい気がします」といった家族間の交流が制限されることへの保護者の不満・懸念が示されていた。これらから、コロナ禍で子どもたちは様々な点で友だちとのかかわりが制限されていたことがうかがえる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、保育園から小学校への移行期の友だち関係について、地域特性を踏まえ探索的に検討するとともに、コロナ禍で友だちとの接触が制限されていたことを考慮してその特徴を明らかにすることを目的とした。そのために、保護者へのアンケートを実施し、年長時に実施したインタビューの結果とともに検討を行った。

その結果、12名の子どもたちは4つの小学校にそれぞれ2名以上で入学し、小学校のクラス分けでは「保育園の友だち」が「いる」子ども、また、保育園の「年長時の仲良し」と同じ小学校に入学した子ども、いずれも半数以上であることが示された。ただし、小学校1クラス35名定員であることや1学年3～4クラスあることを考慮すると、今回研究対象となった子どもたちの場合、移行期に経験する友だち関係は、新たな友だちが圧倒的多数であると言える。

次に、小学校への移行期における家族との会話では、4月～7月を通して「保育園の友だち」に関する話題が多く、「小学校の友だち」の話題を、「よくする」ようになったのは7月以降であった。古川・小泉・浅川(1992)は、山本らの調査から、1年生が「一緒に勉強したい」友だちは、男子は4月下旬から、女子は6月以降に、同じ幼稚園出身より他の幼稚園出身を第1位に選ぶ子どもが増加したことを紹介している。このことから、早ければ入学後すぐに、遅くとも2か月後には、同じ幼稚園出身の友だち以外の新しい友だちが最も身近な友だちになる子どもが多く、顔見知りといった物理的(地理

的)要因による友だち関係の再編成が行われるのではないかと指摘している(古川・小泉・浅川, 1992)。今回は保護者アンケートではあるが、コロナ禍により、マスク着用で友だちの顔がわかりにくい、小学校再開から分散登校が終わるまでは特に友だちとの会話が制限されているなどから、顔見知りである「保育園の友だち」の話題が多く、小学校再開から2か月目であろう新たな友だちに話題に挙がるようになったのではないかと考えられる。

また、6, 7月の「年長時の仲良し」の話題では、同じ小学校に「年長時の仲良し」がいる場合は、一緒にした遊びや活動など実際に行った行動や会話の内容が挙げられていたのに対し、「年長時の仲良し」が同じ小学校にいない場合でも、その友だちがどうしているか気にかけていたり、一緒に遊びたい願望があったりするなど、「年長時の仲良し」への思いが継続していることが特徴であった。このことも、コロナ禍で新たな友だちとのかかわりが制限されているもつで、就学前までの友だちの存在が支えになっていたのではないかと考えられる。

また、学童保育所と小学校の友だちに共通する話題から、まずは新たな友だちの〈名前〉を覚えることから始まり、学校の席順、お弁当やおやつで席が近いことや一緒にドッチボールやトランプなどの〈遊び〉をしたこと、あるいは一緒に〈登下校〉するといった行動をきっかけに新たな友だち関係が形成され始めることが読み取れた。加えて、「小学校の友だち」にのみ見られた話題として、先生に褒められたり、怒られたりといった友だちの〈注目される行動〉が特徴であった。

次に、6月以降、保育園、学童保育所、小学校それぞれの友だちと一緒に遊ぶことがあるかどうかについては、「保育園の友だち」とは「よくある」「時々ある」が多いが、学童保育所や小学校の新たな友だちと一緒に遊ぶことは「全くない」か、「ほとんどない」ことが多いと分かった。この結果は、コロナ禍であることに加え、

保護者同士の関係がまだできていないためとも考えられる。

最後に、友だち関係に関する保護者の心配などを尋ねたところ、気になることなどが「ある」人が相対的に多く、漠然とした不安やさまざまな制限があることへの不満・懸念が示された。

以上の結果から、小学校への移行期における配慮や支援として、次の三点が挙げられる。第一に、新たな友だち関係のきっかけづくりとして、まずは「名前」と「顔」が覚えられるような様々な工夫をすることである。特にコロナ禍では、マスク着用と未着用の写真などを活用してもよいだろう。第二に、席が近い子ども同士や同じ園出身などのつながりを生かした少人数グループによる遊びや活動を通して、新たな友だちとのかかわりを支援していくことである。第三に、＜注目される行動＞は子どもの印象に残りやすいことから、教師（おとな）が子どもたちの良いところを積極的に取り上げることで友だちの特性を認識するきっかけになるだろう。ただし、注意をする際には、声の掛け方やタイミングなどに十分配慮する必要がある。

本研究は、保育園から小学校への移行期である就学後数か月の友だち関係について、保護者アンケートによって検討したが、2020年10月以降、国レベルの様々なGo to企画が進み、コロナ禍での人々の営みも変化している。したがって、その後の友だち関係がどのように変化していくのか、実際の子どもの行動を観察することも含め、さらなる検討が必要である。

引用文献

- 綾野 鈴子・西坂 小百合・村上 康子・権藤 桂子 (2019) . 幼稚園から小学校への移行期の母親の適応要因. 共立女子大学家政学部紀, 65, 93-102.
- 古川雅文・小泉令三・浅川潔司 (1992) 小・中・高等学校を通した移行 山本多喜司・S・ワップナー (編著) 人生移行の発達心理学, 北大路書房, pp152-178.
- 一前 春子 (2011) . 幼稚園から小学校への移行期に関する考察 共立女子短期大学文科紀要 54, 15-26.
- 岩立京子 (2012) . 幼保小連携の課題と今後の方向性. 保育学研究, 50, 76-84.
- Kawahara, N., & Negayama, K. (2018). The perception of intimate friends in preschool children: A comparison between children and nursery teachers. 25th Biennial Meeting 2018 ISSBD
- Kawahara, N., & Negayama, K. (2019). Dyadic analysis of peer relationships in 3-year-olds: Comparison of children's sociometric data and teachers' reports 29th Annual Meeting 2019 EECERA
- 河原紀子 (2019a) 幼児期における「親密な友だち」の発達的特徴：横断的検討から 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要, 25, 87-100.
- 河原紀子 (2019b) . 4歳児における「友だち」の認識 —子どもの回答と保育者の評価の比較から— 日本心理学会第83回大会
- 河原紀子 (2020) . 幼児期における「友だち」の認識：インタビュー調査による短期縦断的検討 共立女子大学家政学部紀要, 66, 133-140.
- 倉持 清美 (2016) . 人の親密さ・かかわり欲求はどのように育つのか：愛着・集団遊び体験 (特集 友だち関係につまずく子) 児童心理, 70, (8) , 534-539.
- 椋田 善之 (2013) . 幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程：入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 53, 1342-1050.
- 中澤 潤 (2017) . 小学校移行期における行動・情動制御と仲間関係 植草学園短期大学紀要 19, 33-38.
- 酒井 朗 (2010) . 移行期の危機と校種間連携の課題に関する教育臨床社会学：「なめらかな

接続」再考,教育学研究, 77 (2), 132-143.

山田有希子・大伴 潔 (2010). 保幼・小接続期における実態と支援のあり方に関する検討-- 保幼5歳児担任・小1年生担任・保護者の意識からとらえる. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 61, 97-108.

山本多喜司 (1991). 人生移行とは何か 山本多喜司・S・ワップナー (編著) 人生移行の発達心理学, 北大路書房, pp 2-24.

-
- 1 年長クラスで「いつも一緒に遊んでいる友だち」は誰か尋ねたことに対し、挙げられた友だちを「年長時の仲良し」とした。
 - 2 研究協力児が所属していた年長クラス20名の幼児は、6つの小学校へ分かれて入学し

た。この中には、同園から小学校へ一人で入学する子ども、つまり他に同園出身の友だちがいない事例もあった。

- 3 複数のカテゴリが該当する場合はそれぞれカウントした。

謝辞

本研究にご協力いただきましたA保育園の子どもたちと保護者の皆様、保育者の方々に心より感謝申し上げます。また、本論文の執筆にあたって有益なご助言をいただきました早稲田大学の根ヶ山光一先生にお礼申し上げます。

本研究は、JSJP科研費JP17K04368の助成を受けて行われたものです。